

中京大学

➔ CHUKYO UNIVERSITY

未来を見据え 高校・産業界との コラボレーションを 加速させる大学

産業界とも連携し、積極的にキャリア教育を推進している中京大学では、2016年度から企業・高校・大学のコラボレーションによる「産高大連携講義」をスタートさせた。産高大連携、産官学連携が盛んになるなかで、連携の輪をさらに広げたこの新しい取り組みにはどのような狙いがあるのか、高校生・大学生それぞれにとってどのような成長の機会になっているのかをレポートする。

取材・文／伊藤敬太郎 撮影／栗本剛樹



四日市南高校&井村屋との プロジェクトなどに取り組む

中京大学総合政策学部の坂田隆文教授は、積極的にゼミで産学連携によるPBL (Problem-based learning: 課題解決型学習) を取り入れ、さらに、2016年度から企業・高校と連携した「産高大連携講義」に取り組んでいる。

その一つが四日市南高校と井村屋株式会社(以下、井村屋)、坂田教授のゼミとのコラボレーションによる商品開発プロジェクト。同時期に坂田教授のゼミでは中京大学附属中京高校と中日ドラゴンズとのプロジェクトも進められた。高校生に大学での学びを体験させる産学連携、産学連携の動きは全国的に広がっており、高校と企業が連携した商品開発も今では珍しくない。しかし、そんななかでも「高校×大学×企業」という組み合わせは、一般的な動きの一步先を行くものだ。

広報部副部長の鳴川義雄氏は、取り組みの背景を次のように説明する。

「高校生は大学合格がゴールになってしまっており、高校での学びと大学での学びに連続性がないことが課題です。

大学生も社会に目を向けるのは就職活動を始めてからで、ここにも分断がある。このような課題意識から、本学では大学の枠を超えて、社会人基礎力の養成につながるキャリア教育を積極的に推し進めてきました」

総合政策学部の開設が2005年。同学部はキャリア教育の充実をテーマに掲げ、4年間の学びと将来を結びつける『キャリア・デザイン』をはじめとするキャリア科目を開講。この授業をアレンジして、地域の高校で10年ほど前から「キャリア・デザインから進路を考える」というテーマで大学進学先の先を考える講演会を年間60校ほどで行っている。このような一連の取り組みをバックボーンとし、高校側のニーズに合わせて今回の新しい動きが生まれたという。

高校生が商品を企画し 大学生がファシリテーターに

では、四日市南高校と井村屋とのプロジェクト(図1)を例に、その教育の中身を見ていこう。

「井村屋のアイスクリーム」をテーマに

商品開発に取り組んだのは高校生(3年生と1年生の混成)。4~5人で1グループを構成し、各グループでは坂田教授のゼミ生がファシリテーターを務めた。坂田教授はアイデア出しの基本的な考え方などを講義・指導するが、高校生への具体的なアドバイスやフォローは主に大学生の役割だ。

井村屋の商品開発担当者は高校生が考えたアイデアに企業の視点からアドバイス。提案発表会には井村屋から取締役も招かれた。

どんな課題を見つけ、何を学び、 どれだけ成長したかが重要

坂田教授はこのプロジェクトのポイントを次のように語る。

「井村屋の方には、高校生に対して企業の基準で厳しく接してもらうようお願いしました。『高校生だからこの程度でいいだろう』という接し方では、生徒は社会の本当の厳しさも、世の中に出回っている商品がどれだけの苦勞の末に生まれているのかも理解できません。ダメな企画に対しては、はっきりダメ出しをして



● 総合政策学部 坂田隆文教授

もらうことが重要なんです」

一般的には、高校生と企業が連携する場合、商品開発自体が目標になってしまいやすい。大人が手取り足取り指導して、商品が形になれば高校生は一定の達成感を得られる。しかし、坂田教授はそこに主眼はおいていないという。

「商品という結果以上に大切なのは、生徒自身がどんな課題を見つけ、何を学び、どれだけ成長したかということです。高校生は、普段先生や保護者にお膳立てをしてもらった環境の中で生活していますから、何が課題なのかを自分で考え、解決策を探るという経験を積んで

いません。しかし、社会に出たら誰も1から10までは教えてはくれません。1、2のヒントから、自分で考えて10の要求に答えることが求められます。このように社会で必要とされる課題解決力を養うことこそがこの講義の目的です」

アイデア出しに限らず、社会人に対する態度、コミュニケーションの取り方なども、「高校生の常識」ではなく、「企業の常識」に従って指導するという。

高校生の常識が社会では通用しないことを学ぶ

「私たちも、井村屋の方も、高校生のために、自分の仕事の時間を割いてプロジェクトに参加しています。社会人の場合、相手に時間を作ってもらったら感謝の気持ちを表現するのが常識です。しかし、何かを与えられることが当たり前になっていて、自ら感謝を表現できない生徒もなかにはいます。そのようなときには、今、この場が、誰のどんな努力によって成り立っているのかを理解してもらうために厳しく指摘します」

同様にタイムマネジメントや納期に対する意識、お客様のリクエストに応えることの重要性などに関しても、「高校生だから」という妥協はせずに指導。

プロジェクト期間中は高校生と教授・大学生との間でメールのやりとりも頻繁に行われるが、これも指導の対象だ。署名の入っていないメール、改行がなく読みづらいメールなどは、「これでは企業では通用しない」と突き返す。

そのような場合も、何が正解かを最初から教えることはせず、生徒が自分で課題を明確にして質問してきたときに初めて答えを与えるという。

教授自身が「ハードマネジメント」と呼ぶこのような厳しい指導は、ゼミで一貫して実践してきたことでもある。

「高校生に対してはゼミの3~4割程度の厳しさに抑えてはいますが、自分で考えることを促すには、突き放すことが必要なのです。社会の常識を突きつけられて、『自分たちの当たり前が、社会では当たり前ではない』と気付くことで、彼らの視野は確実に広がっていきます」

安易に成功を与えるよりも、リアルな失

図1 四日市南高校・井村屋・坂田教授のゼミとの産高大連携講義(全4回)の流れ

<p>第1回 (2016.12.11)</p> <p>坂田教授による導入講義 導入として、坂田教授が「高校と大学・社会の違い」「働くことの意義と実際」などを講義。その後グループ別にディスカッション。</p>		
<p>第2回 (2017.1.22)</p> <p>グループで提案する商品を決定 前回の宿題として各グループがそれぞれ100個のアイデアを準備。そのなかからグループで提案する商品を決めていく。</p>		
<p>第3回 (2017.2.5)</p> <p>商品開発担当者からのアドバイス 井村屋の商品開発担当が参加。磨き上げたアイデアに対して直接アドバイスをもらい、改めて話し合っって試行錯誤しながら改良。</p>		
<p>第4回 (2017.3.12)</p> <p>中京大学での提案発表会! 3カ月にわたって練り上げたアイデアの発表会。3チームが、データを交えながらそれぞれの商品企画をプレゼンテーション。</p>	<p>中京大学名古屋キャンパス清明ホールでの提案発表会。知覚過敏の人が多くことに着目した「知覚過敏になりにくい一口アイス」を提案したチームが優秀チームに選ばれた(左下)。井村屋の中道裕久常務取締役がそれぞれのチームに講評とアドバイスをを行い(右上)、最後は中京大学の安村仁志学長から修了証を授与(右下)。</p>	

敗を経験させることのほうが、生徒に多くの気づきを与える。そして、それを活かすには自分が経験したことのリフレクション(振り返り)が重要となる。なぜ失敗したのかを考え、自分に何が足りなかったのかを知り、それを補う努力をすることで、高校生も大学生も短期間でみるみる成長していくという。

教えることによって 大学生も成長する

四日市南高校で生徒がどのように成長したかは下のコラムにまとめているが、より日常的なレベルで意識の変化が芽生えた例として坂田教授は次のようなエ

ピソードを挙げる。

「家に帰ったとき、ふと親に対して『ありがとう』と口にしてたという受講生がいました。親が食事を用意してくれるのも、学校に行かせてもらえるのも当たり前のことではないと気付いて、自然に出てきた言葉なんですよ」

一方、ファシリテーターとして参加する大学生にとっても、この産高大連携講義は成長の機会になるという。

「高校生に教えるには、自分がより深く理解する必要があります。『半学半教』の学修効果は高く、特に後輩のいないゼミの2年生の成長度は大きいですね。また、人に教えることの難しさを知ること、私たち教員の苦勞がわかり、感謝の

気持ちも生まれるようです」

中京大学の産高大連携講義はまだスタートしたばかり。ついていけず脱落する生徒もあり、リフレクションを誰がどうサポートするのかなどの課題も見えて来ると同時に、一定の手応えは得られた。同大学は、このような高校・産業界との連携を深める取り組みをさらに拡大していく構えだ。

その流れのなかで、2018年度入試からは国際英語学部、経済学部、法学部で高大接続入試が始まる(詳細は次ページ)。先駆的に動き続ける同大学の開かれたキャリア教育や、それに連動する新しい入試制度が今後どう展開されていくのかが注目される。

高校の声

四日市南高校 (三重・県立)

主体的であり対話的でもある 深い学びが生徒の成長を促した

外部の本気の大人と接することで 生徒の意識が大きく変わる

四日市南高校は、「3年後(大学受験)、30年後(社会)に生き抜く力をつける」をスローガンに、2年前から進学校としてのキャリア教育に取り組んでいる。

「生徒の主体性や課題解決力を養うことを目指し、企業・地域など外部と連携した企画を複数進めています。今回の産高大連携講義はそのうちの一つ。3年生と1年生の混成で約30人が参加しました」(鈴木達哉校長)

外部の本気の大人と接することで、受け身になりがちな生徒の意識を変えることが高校側の狙い。商品企画に関しては大人がセントを与えることはせず、すべて生徒が自分たちで考えたという。

「緊張感のある環境で、生徒たちの目の色も変わっていました。ただ、高校生が考えるアイデアですから、簡単には認められません。生徒は突き放されることに慣れていないので、ダメ出しをされると落ち込みます。しかし、そこは大学生がお兄さんお姉さんの立場からうまくフォローしてくれる。グループ内で意見が対立したときも大学生のファシリテーションで軌道修正していました。全体として、主体的で対話的な深い学びが実践されていま

たね。これこそ本当のアクティブ・ラーニングです。また、坂田教授に鍛えられた大学生の姿は、『大学生はすごい。自分たちもあんなふうになれるだろうか』と生徒たちへの刺激にもなっていました」(鈴木校長)

参加した生徒は普通の授業でも リーダーシップを発揮

では、このような経験を通して生徒にはどのような成長・変化が見られたのだろうか。

「参加した生徒は、普通のアクティブ・ラーニングの授業でもリーダーシップをとるようになっていきますね。また、坂田教授に、『なぜそう思う?』『根拠は何?』と問われ続けるなかで、論理性が養われるとともに、大学での学びがどういものなのかも体験的に理解できたと思います。実



際に自分たちで商品開発に携わったうえで井村屋の役員の方の話を聞いたことで、経済を学ぶことへの関心を高めた生徒もいました」(同校キャリアコーディネーター/森裕一先生)

この他の企画も含めて、今のところ参加しているのは全校生徒の1割程度。今後は3割程度にまで増やすことが目標だという。



● 鈴木達哉校長



● 森 裕一先生